慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「三十人の女房：落窪の君の御前を中心に」
Sub Title	
Author	山本, 令子(Yamamoto, Reiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2004
Jtitle	三田國文 No.40 (2004. 12) ,p.1- 14
JaLC DOI	10.14991/002.20041200-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20041200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三十人の女房――落窪の君の御前を中心に」

山本　令子

はじめに

近年の物語研究に於いては、乳母子に代表されるところの際立った個性を有する女房については、次第にその役割が解析されてきたものの、集団として点描されるに過ぎない女房たちについては概ね、儀式の場を彩る景物としか読み解かれてこなかったように思われる。

本稿では、群衆として物語の背景に溶け込んでいると憶しい女房を巡る叙述について、殊にその人数に注意を向けることで、意味するところを考えてみたい。

落窪の君の女房たち

『落窪物語』のヒロイン落窪の君の女房といえば、夫帯刀と共に女君のために活躍するあこきの存在がまず想起されよう。母君在世中から「うしろみ」と名付けて使われていた女童で、髪が長くをかしげであるので三の君付きに直されるにあたって、あこきと改名されたという。実際のところ、父源中納言邸時代の女君にはあこき以外にこれといった女房が仕えていた形跡は見られない。物語の冒頭部分に記されているように、落窪の君自身が「仕うまつる御たちのかずにだにおぼさず」[1]扱われていたのである。

しかしながら、男君の庇護の下、その母左大将の北の方の所有する二条邸、ついで自らが伝領する三条邸に移り住む頃には当然多くの女房がかしづくこととなる。

すなわち、落窪の君を二条殿に迎え取った男君は、

「人少なにていとあしかめり。あこき、人求めよ。殿なる人〳〵も聞こえんと思へども、ゆかしげなき。あこきおとなになりね。いと心およすげためり。」

と命じる。女房が不足している状態を憂慮し、あこきに新たな女房たちを探すよう言い付けるのである。殿―両親の邸の女房たちを「ゆかしげなき」と断じている点も興味深いが、この様な折には本邸から女房を呼び取ることが窺われる。

仰せを受けて、あこきはこれまで多くの品の調達を頼ったおば和泉守の妻に手紙を遣る。この他にどのような方面に依頼が行われたかは描かれないものの、十日ほど後には新参の女房十余人が集まっている。和泉守の元からは、守の従妹が出仕し「兵

庫」の名を与えられた。また、あこき自身は女童から大人の女房となり、「衛門」と呼ばれるようになったという。

その後も、

「人はいくらもまゐらせ給へ。女房多かる所なん心にくゝはなやかにも聞こゆる。」

との男君の指示を受け、先に参上した女房たちの引きで新たな女房たちが参集したため、年内には早くも「廿余人ばかり候」という有様であった。

男君もさることながら、殊に女君の御心がのどやかでよくていらっしゃるのでお仕えしやすい、との評言には、女房階級の女性たちの本音が表れていよう。こうした評判を聞きつけて、父中納言邸にあって、落窪の君に同情を寄せていた少納言までもが、落窪の君のもとであるとは知らないままに、弁の君という女房の手引きで出仕することとなる。

更に、三条の邸に移るにあたっても、男君から

「さる心して若き人〳〵いますこし求め設けよ。かの中納言のもとによろしきものはありきや。それもとかくは言はで呼び取れ。のちにねたがらせん。」

と申し付けられた衛門（かつてのあこき）は、中納言邸で「きよげなり」と見ていた女房たち―継母北の方付きで大層きれいな一の女房であった侍従の君[2]や三の君付きのすけの君、たいふのおもと、下仕へのまろやたちを迎え取ることにする。ここでもまた、権勢盛んな邸で女房たちを大切になさる、と聞いた若人たちは、主中納言が耄碌してきたことから、次の奉公先を探していたところに渡りに船と、あっさり承知する。中納言の人望の無さが浮き彫りにされると共に、女房階級の割り切った変わり身の早さが酷薄なまでに克明に語られのである。

それは、かつて三の君付きの女の童に直されるにあたって、

「わが君（落窪の君）に仕うまつらんと思ひてこそ親しき人の迎ふるにもまからざりつれ。何のよしにか異君取りはしたてまつらん[3]」

と泣いたあこき（当時はまだうしろみの呼び名であった）の忠誠とは全く異質な物であった。中納言邸を見限る女房たちは、落窪の君の現在の幸福を補完する存在であると共に、そこに至るまでのあこきの献身を再評価させる機能をも担っているのである。

越前守の言葉

周知の如く、『落窪物語』の現存諸本には共通の損傷箇所が見受けられ、いずれの本文をとっても意味がとれない場合がままある。その内、女房の叙述に関わるものとしては、次の例が注目される。

「四十人の女房たちの中にこもりておくこそしにたれ。三の君の御方のそれ、四の君の御方の何の君、かのおもと、まろやさへなんさぶらひつる。花を折りてさうぞきていとよしと思へるや。」

父中納言に付き従い、三条邸での饗応から帰宅しての越前守の言葉である。掲出した本文は、新大系の底本である九条家本のものであるが、冒頭の「四十人の女房たち」が「三十人の女房たち」となっている本も多い[4]。

この箇所については、早く中村秋香『落窪物語大成』[5]が、「前に『御達二十人ばかり居並みたり』とありてこゝに三十人といへるはその盛なるさまを述ぶるにつきて大数によりて盛に之をいへるなり」と指摘している。前に云々とあるのは、越前守に対する饗応の場面の叙述に、男君の命を受けた衛門、少納言が台盤所に守を呼び入れた条りに、

三間ばかりあるに、畳きよげに敷きて、整へたるやうに劣らず見ゆる御たち廿人ばかりゐ並みたり。おまへにありけるが「立て」とのたまひければ来つどひたるがゐたるなりけり。

とあるのを指す。すなわち越前守による誇張的表現と解するのである。

その後の諸家も「二十人」との矛盾を、誇張あるいは誤写として説明されてきた。主な注釈書の説をそれぞれの本文及び解釈と共に次に掲げる。

a. 大系[6]（矛盾についての言及は特にない。）

四十人の女房たちの中にこもりておくこそしにたけれ。

「おくこそしにたけれ」は久老本では「をくこそしにたれ」とある。「しにたれ」を仮に「しりたれ」の誤写とすれば、「（自分は四十人の女房たちの中にとりかこまれて）奥むきのことも知っている」の意とでもなろうか。

b. 全集[7]（誤写）・新全集[8]（誤写あるいは誇張）

四十人の女房たちの中にこもりて、さこそ強ひたれ。

四十人の女房たちの中に取り囲まれて、しかじか酒を無理強いされたよ。

c. 集成[9]（誤写あるいは誇張）

三十人の女房達の中に篭りて。おほくこそ強ひにたれ。

（「おほくこそ」以下の傍注）ずいぶんたくさん酒を無理強いした。

d. 校注[10]（誇張）

三十人の女房たちの中にこもりて、おほくこそ強ひにたれ。

（「おほくこそ」以下の頭注）「代はりがはり強ふるに」を受ける。盃を多く無理強いにした。底・尊をくこそしにたれ。底イ・三による。

e. 注釈[11]（誤写あるいは誇張）

四十人の女房達の中に篭りて、さこそしにたれ。

四十人の女房達の中に取り篭められて……、それこそ大層なもてなしでしたよ。

f. 新大系[12]（矛盾についての言及は特にない。）

四十人の女房たちの中にこもりておくこそしにたれ。

「おくこそ」も「しにたれ」も語義不明。「しに」は「死に」か。

「おくこそ」以下については殊に異同も多く、その意味をとり難いことが混迷を深めていようが、いずれも主語を女房たちとして、もてなしの様子を表すとされる点では一致している。問題は、「こもりて」までであるが、集成が読点ではなく句点を用いられた様に、これ以下の句とは主語を異にする。諸注は「こもりて」の主語を越前守とされるが、越前守を主語とするなら

ば、「とりこめられて」位の言い廻しが相応しいようにも思われる。「こもりて」の主語を落窪の君とみてはどうだろうか。多くの女房の中にかしづかれている様と解するのである。

女君の父中納言が三条邸に参上すると、男君は「みなみの方の母屋の廂」で対面をする。女君は「丁のうち」に座っていた。御前にいた女房たちは、「北おもてへ」との仰せに皆下がったという。父娘の再会に際して人払いが行われたのである。そして、中納言や供の者たちへの饗応と平行して、越前守を饗応するために台盤所に「来つどひ」て居並んだ。とすれば、御前にいた女房のすべてが「来つどひ」たとは考えにくい。父中納言の饗応等に侍した者もいたと考えるのが自然であろう。「四十人」あるいは「三十人」の御前の内、「二十人」が越前守の饗応に廻ったと考えれば矛盾は生じない。

そこで、以下においては、「四十人」あるいは「三十人」が女君の御前に侍す女房の数を指すとの仮定にもとづき、『落窪物語』内部での整合性と女房の人数の意味するところを検討していきたい。

落窪物語内部での整合性

まず、落窪の君の御前にはどれほどの女房がいたと考えられるであろうか。この場面に至るまでの叙述を追ってみよう。

①少納言の初出仕の場面

前節で確認したように、今参りの女房たちを集める過程で、中納言邸にあった少納言の君が出仕することとなった。

その折の、落窪の君御前の様子については、「そよ〳〵とさうぞき、かざみ着たる人、いと若うきよげなる、十余人ばかりもの語りして、いとなまめかしげなり。」とある。

新参の女房を迎えるごく私的なくつろいだ場面であるが、汗衫を身につけた女童を含めて十数人が侍している。

②祭見物の場面

打ちくひを巡って落窪の君の父中納言方と争い、典薬助や継母北の方に恥辱を与えた、賀茂祭の条りである。「さう〳〵しきに、御たちにもの見せん」との男君の言葉に、かねてより御車を新調し、女房たちに装束を与え、準備がなされた。祭りの見物に出た「車五ばかり、おとな廿人、二つはわらは四人、下使ひ四人乗りたり」は当然、この時点でお仕えしていた総数ではなく、差し障りのある者たちを除き、見物に相応しく選り整えた人数である。更に男君の弟たちの一行が加わり、総勢は二十台余りであったという。

③父中納言邸の女房たちが迎え取られた場面

三条邸への殿うつりに向けて、中納言邸の見所ある女房たちが引き抜かれ、初見参する。落窪の君自身は、暑気あたりのため会わなかったが、今参りの女房たちは、「聞きしもしるくきよげなる若き人廿人ばかり、しらはりのひとへがさね、二あゐの裳、濃きはかま着て、五六人、赤らかなるはかまにてあやのひとへがさね引きかけたる、薄色のこめの裳、あやなどおなじやうにさうぞきつゝ、かい群れ群れていで来つゝ、人〳〵の見るにわびぬべし」という有様であったと記されている。①少納言

の初出仕の場面と同じ様な場面ながら、女房たちの数は確実に増加している。

④三条邸への殿うつりの場面

三条邸への殿うつりに際しては、②祭見物の場面と同様、前もって女房たちに装束一具づつが与えられた。「いぬの時ばかり渡り給。車十して儀式めでたし。」とあり、内訳は不明ながら、祭見物の場面の車七台よりは増加していることがわかる。男君と女君が乗る一の車を数に含めるかどうかによっても変わってくるが、女の童・下仕への車が一台づつとすれば、女房の車は七～八台（三十人前後）というところであろうか。

⑤父中納言邸の法華八講の場面

父娘の再会の後、孝養として八講を主催することとなる。「せばからん。人はまゐり通ひつゝ聞け」との男君の仰せから、供をする女房の人数が制限され、「車六七して渡り給ぬ」とある。従って常は、車六七台では乗り切れない数の女房たちが侍っていたことがわかる。

以上、①～⑤の叙述によれば、問題の越前守饗応の時期（④と⑤の間）には、三十人前後の女房たちが女君の近くに控えていたこととなる。

次いで、『落窪物語』の中で落窪の君の御前同様、その人数が繰り返し問題とされる四の君の女房について検討しておきたい。まず、帥中納言を婿取るにあたって、三条邸の西の対に迎え取られた四の君のお供は僅かに「おとな二人、わらは一人」であった。人少なであることを聞いた落窪の君は結婚当日、「わが御人、わらは一人、おとな三人、下仕へ二人と渡し給」とある。

帥は、自邸に迎え取るに先立って、四の君に対して「くだらんと言はん人召し集めて」と、筑紫下向に同行する女房たちを集めるよう告げるが、これも人少な故の発言と解せよう。帥邸に移るにあたっても、「車三して渡り給ぬ」とひっそりとした有様であり、先に落窪の君に差し向けられた女房たちが「いまさへは何しにかまゐる」と同行を拒んだのに対して、落窪の君が強いて添えて遣ったという。

全体的に、不如意さと、それを補おうとする落窪の君の厚意ばかりが際立っているが、さすがに下向を目前に、日に二・三人の今参りが集まることとなり、最終的には「おとな卅人、わらは四人、下仕へ四人なんゐてくだるかずに定めたりける」ということで、落窪の君方から遣わされた女房たちは返している。「おとな卅人、わらは四人、下仕へ四人」という数は、三条邸への殿うつりの場面で推測された落窪の君の女房の数とほぼ一致するのではないか。

継子いじめ→報復→孝養という構成をとる『落窪物語』に於いて、四の君の幸福はあくまで落窪の君及び男君の孝徳によって実現されるのであり、その栄華が落窪の君をしのぐことは考えられない。従って、四の君御前の女房の数は、落窪の君のそれを規定することとなるのである。

女房の人数が担う意味

ここで、『落窪物語』を離れて広く同時代の文献に見える集団としての女房の描写を検討していきたい。

まず、成立年代の比較的近いと思われる『宇津保物語』を見渡すと、「俊蔭」巻で、兼雅の三条邸に迎え取られた俊蔭女の御前について、

大人二十人ばかり、うなゐ、下仕へなど、いと多く召し集めて、使はせたてまつりたまふ。[13]

とあるのをはじめとして、「藤原君」巻の絵詞に見える滋野真菅の娘たちの御前、「春日詣」巻の絵詞に見える桂邸での兼雅・俊蔭女夫妻の御前、「嵯峨院」巻の絵詞に見える大宮の御前、「蔵開下」巻に見える兼雅の一条邸に住まう嵯峨院女三宮の御前はいずれも、二十人の女房から構成されており、『宇津保』に於いては標準的な人数といえよう。

これに対して、御前の人数が二十人を超える場合を見ていくと、「藤原君」巻に見えるあて宮並びに仁寿殿の女御の御前、「吹上上」巻に見える種松邸での涼の御前、「国譲下」巻に見える春宮参内の供人がいずれも三十人、「楼の上上」巻に見える秘琴伝授に際して京極邸に移る折の供人が、俊蔭女・犬宮・それぞれ三十人、[14]仁寿殿の女御については、

女御殿のみぞ、これは数まさりたるといふべきなり。[15]

と記されている。これらは、いずれも厚く遇されている人物であり、標準を超えた人数の女房がつき従うことで、そのいつきかしづかれ方の並々ならないことを強調していると考えられる。

殊に、あて宮については、「あて宮」巻に見える東宮参入の準備の様子が、

御調度、御装ひを、麗しく清らに調ぜられ、御供人、大人四十人、みな四位、宰相の娘、髪丈にあまり、丈よきほどに、手書き、歌詠み、こと、きん弾き、人のいらへすること、みな上手、歳二十余の内、唐綾、ただの絹一つ混ぜず、みな赤色、童六人、五位の娘、十五歳のうち、かたち、するわざ、大人のごとく、装束、唐綾の赤色の五重襲の上の絹、綾の上の袴、袷の袴、綾の袿着たり。下仕へ八人、手織りの絹は混ぜず、檜皮色に紅葉襲、侍の娘。樋洗まし二人、皆かくのごとし。

と詳述され、また「国譲上」巻に見える、伯父季明の喪に服するため里邸に退出する折の供人が、

御車二十、大人四十人ばかり、童、下仕へ八人、樋洗し二人。

と記されるなど、その権勢を示すべく四十人もの女房が配されている。[16]『宇津保』に於ける集団としての女房の叙述は、その人数の多寡によって、主の置かれた状況を端的に物語るものであった。

これに対して、『源氏物語』の場合には総じて、『宇津保物語』のように即物的・羅列的な描写はしない姿勢が見られることから、女房に関する叙述に於いても、実数には言及しないのが常態である。一例をあげれば、「梅枝」巻に見える明石の姫君の裳着の条り。姫君は勿論、養母である紫の上、腰結役である秋好

中宮などの女房が一堂に会する華やかな場面であるのにもかかわらず、

御方々の女房おしあはせたる、数しらず見えたり。[17]

の一文であっさりと片付け、その衣装への言及はおろか、人数すら記されないのである。

このように『源氏』に於いては省筆されることの多い群衆としての女房の叙述ではあるが、珍しく丁寧に描写される場面も存在する。「葵」巻で葵上の喪が明けて、源氏が左大臣邸を辞する条りに、

うち見まはしたまふに、御几帳の背後、障子のあなたなどの開き通りたるなどに、女房三十人ばかりおしこりて、濃き薄き鈍色どもを着つつ、みないみじう心細げにてうちしほれつつゐ集まりたるを、いとあはれと見たまふ。

とあり、「宿木」巻に見える匂宮の正室となった夕霧の六の君の様子として、

よき若人ども三十人ばかり、童六人かたほなるなく、装束なども、例のうるはしきことは目慣れて思さるべかめれば、ひき違へ、心得ぬまで好みそしたまへる。

とあるのが、それである。前者は葵の上が后がねとして大切に養育されたこと、婿取った源氏ともども左大臣家がかしづいたことを思い起こすよすがとして、後者は中君を圧倒する六の君、更にはその父たる夕霧の権勢を示すものとして機能している。

また、「蓬生」巻では源氏須磨流離の後の末摘花の生活について、

すこしもさてありぬべき人々は、おのづから参りつきてありしを、みな次々に従ひて行き散りぬ。女ばらの命たへぬもありて、月日に従ひては、上下の人数少なくなりゆく。

と記すことにより、その窮乏の様を描き出している。このような人少なな状態は、不如意を表すばかりではなく、大きな事件の引き金ともなっていく。

すなわち、「若菜下」巻で、女三宮のもとに柏木が忍び入る、その背景としては、二条院で病に臥せる紫の上の看病のために、そもそも六条院が人少なであったこと、それに加えて、翌日の賀茂祭の御禊のために、斎院に差し上げる女房十二人や見物に出掛ける女房たちがその準備に忙しく、宮の御前が手薄になっていたことが描かれている。蹴鞠見物に夢中となって、宮の姿を柏木たちに見せてしまった場面といい、日頃から粗忽さの目立つ三宮の周辺ではあるが、ここでもその心用意の無さが災いを招くのであり、それを象徴するのが御前の人少なさであった。

『源氏物語』に於いては標準的な人数がどのあたりに設定されているのかさし示す記述は見出だせないものの、先掲の葵上や六の君の例から推し量るに、『宇津保』同様二十人と考えて差し支えないのではなかろうか。

『堤中納言物語』の一篇「貝あはせ」には、母のない姫君の窮状に同情して立派な洲浜を届けた蔵人少将が女の童の手引きで邸内に忍び入り、姫君の御前を見通した様が次のように描かれている。

ただ同じほどなる若き人ども、二十人ばかり、さうぞきて、格子あげそそくめり。[18]

喜びに沸き返る様に幼さは隠せないものの、弟君一人しか頼る

者のない姫君にも二十人の若人が仕えていたことがわかる。

後期物語に於いても、標準は二十人であったと憶しく、『狭衣物語』巻一に見える今姫君の御前、同じく巻三に見える一条宮から堀川関白邸へ迎え取られる一の宮の供人、『浜松中納言物語』巻三で衛門督が大弐の女を迎え取る場面での供人がいずれも二十人あるいは二十人ばかりと記されている。

また、『源氏』の手法を受け継いで、窮乏の様を語る際には人少なであることが語られる。たとえば、『浜松』巻三に見える吉野の尼君と姫君に仕えていた女房たちについて、次のようにある。

さぶらふ人々の、わづかに五六人ばかりあるにも、何を頼みどころにてかは、いとかうたづきなう、わびしき山の末には過ぐすべからむと、いみじう心苦しうとも、なほかくては永らへがたくこそなど、なげきつる心地どもも、あきれいたきまでおもひよろこびたること、たとへむかたなし。[19]

中納言の援助によって持ち直すあたりまでも含めて、末摘花物語の焼き直しといって差し支えないのではあるまいか。

また『夜の寝覚』巻二で、大君方から圧迫されている中君の様子を宰相中将が父入道に報告する場面でも、女房たちが暇をとって里へ下がってしまい、御前には五六人しか侍していない状況が語られている。

逆に手厚い場合としては、『夜の寝覚』では三十人が用いられており、巻一に見える中宮の御前、同じく巻一に見える男君との婚儀に備える大君の御前、巻三に見える督の君参内のため集められた供人がいずれも三十人とされている。『狭衣物語』巻三で今姫君の寝所に宰相中将が忍び入った折に、

帳の帷子をかかげて、このころ参り集まりたる女房、ある限り二十余人、我も我もと重なりゐて見るなりけり。[20]

と記されるのも、参内の準備にあたって今参りの女房たちを集めていたと解されるが、彼女たちが揃って無作法で、様子を見にやって来た洞院の上にたしなめられるのも、母代と今姫君の無分別さを象徴している。

注目すべきは、『浜松中納言物語』巻五に見える関白の姫君の東宮入内の条り、

儀式ありさまは、世のつねならず、女房五十人、童女、下仕へ八人づつ、世に知らぬさまにこちたうもてなされ給ふさま、かたはらにまた人たちならぶべきやうもなし。

及び、『狭衣物語』巻三に見える斎院源氏の宮の本院渡御の御禊の準備の条り、

世の人のことごとしきありさまに思ふらむしるしに、出だし車の飾りなど、例にはまさりたらんを見よかしとて、やがて候ふ人々、数を引き続くべくも思し掟てける。やむごとなき人は、女別当、宣旨など、人々同じと、いま四十人、童八人乗るべき車は、透き通りて、隠れなくあるべきよし、簾も上がりて、我も我もと、心を尽したるに、いかばかりめでたからんずらん。

である。

前者は当代きっての姫君の権勢に、その様子を耳にした吉野姫君が我が身のはかなさを思い知る場面であり、後者は堀川関白が通例よりは華やかにと心掛けて、常からお仕えしている女

房たちをそのまま渡御の列に参加させた結果とある。「いま四十人」を加えた総勢が何人なのか、新全集の底本である深川本の形では判然としない。この部分を旧東京教育大学国語国文学研究室蔵本で掲げると次の様になる。

「世の人のいとことごとしう言ひ思ふらむしるしには、出し車の数など、例にはまさりたらむを見よかし」とて、やがて女房の候ふ限りを引き続くべうぞ、おぼし掟てける。やむごとなき人々十人ばかりは、女別当などの同じ糸毛にて、今四十人、わらは八人乗るべき車は、所々に透きとほりて隠れなうめでたうして参らすべきよし、受領どものあたりて、我も我もと心を尽くしたる、げにいかにめでたかりけむ。[21]

上﨟の女房十人とそれに次ぐ女房四十人で、『狭衣物語』同様、総勢五十人ということになる。ただ、五十人という女房の数は、後述するように史実と照らし合わせても破天荒な数字であり、いかにも後期物語らしい思い切った誇張であると見做したい。

作り物語に較べるとなにがしかの写実性を有すると思われる女流日記などの場合はどうか。女房の数に言及するものは思いの外少ない。中で『紫式部日記』には、敦成親王の出生の前日に参集した女房を「四十余人」[22]、道長主催の五日の産養の折に御帳の東面に居並んだ女房が「三十余人」（この他に御膳を供するために髪上げをした女房が八人）、中宮の内裏還啓に居並んだ女房が「三十余人」（これに加えて内裏の女房が十余人）、敦良親王の御五十日に中宮方に参集した内裏の女房が「十七人」と記されている。いずれも綺麗な数字ではなく、中途半端なところが逆に真実味を感じさせる。

後代の例にはなるが『讃岐典侍日記』には堀河天皇の病床に侍す女房たちについて次の様な記述が見える。

そのころしも、上﨟たち、さはりありてさぶらはれず。あるは子うみ、あるは母のいとま、いまひとりは、とくよりもこもりゐて、この二三年参られず。御乳母たち、藤三位、ぬるみごこちわづらひて参らず、弁の三位は、東宮の母もおはしまさでおひたたせたまへば、心のままにさぶらはるべくもなきにあはせて、それも、このごろおこりごこちにわづらひて。ただ、大弐の三位、われ具して、みたりぞさぶらふ。[23]

盛儀の場とは異なるが、参集すべき立場であっても、さまざまな障りによって参ることができない者も多いことがよくわかる。参内・出産といった場面に於いても、必ずしも整った数にはならなかったのが現実であったのではなかろうか。

また、『枕草子』に見える正暦五年二月の道隆による法興院一切経供養の記事には次の様にある。

御車ごめに十五、四つは尼の車、一の御車は唐車なり。それにつづきてぞ尼の車、後口より水晶の数珠、薄墨の裳、袈裟、衣、いといみじくて、簾はあげず、下簾も薄色のすそすこし濃き、つぎに女房の十、桜の唐衣、薄色の裳、濃き衣、香染、薄色のうは着ども、いみじうなまめかし。日はいとうらかなれど、空は緑に霞みわたれるほどに、女房の装束のにほひあひて、いみじき織物、色々の唐衣などよりも、なまめかしうをかしきことかぎりなし。

関白殿、そのつぎつぎの殿ばら、おはする限り、もてかしづきわたしたてまつらせたまふさま、いみじくめでたし。これをまづ見たてまつり、めでさわぐ。この車どもの二十立てならべたるも、またをかしと見るらむかし。[24]

東三条院詮子が道隆邸に到着した場面であるが、女院一行の車は十五台、内十台が女房の乗用である。対する「此車共」（定子の他貴子や妹たち付きの女房も含むのであろう）は二十台。「四人づゝ、書き立てにしたがひて」呼ばれて乗せられたというが、きっかり四人づつ乗っていたかどうかは判然としない。作り物語のように四十人、八十人と記さずに、牛車の台数で済ませるあたりが『紫式部日記』同様、実情に即しているように思われるのである。

以上の例の内に見えた四十人という女房の人数が担っている意味をもっとも雄弁に物語るのは『栄花物語』の叙述であると思われ、節を改めて考察してみたい。

四十人の女房の意味

まず、「かがやく藤壺」巻に見える彰子入内の記事を掲げる。

女房四十人、童女六人、下仕六人なり。いみじう選りととのへさせたまへるに、かたち、心をばさらにもいはず、四位、五位の女といへど、ことに交らひわろく、成出きよげならぬをば、あへて仕うまつらせたまふべきにもあらず、ものきよらかに、成出よきをと選らせたまへり。さるべき童女などは、女院などより奉らせたまへり。これはやがてこのたびの童女の名ども、院人、宮人、殿人などやうにつけ集めさせたまへり。[25]

四・五位の娘であっても厳しく選り整えたこと、女の童については宮＝彰子方で集めるばかりではなく、院＝東三条院詮子の方からも、殿＝道長の方からも融通したことがわかる。

実は、『栄花物語』の中で四十人の女房が描写されるのは、入内及び東宮参入記事に限られている。[26]それぞれの供人を一覧にすると次の様になる。

①彰子　大人40　童女6　下仕6　（入内）
②妍子　大人40　童女6　下仕4　（東宮参入）
③威子　大人40　童女6　下仕6　（入内）
④嬉子　さきざきの御参りに異ならず（東宮参入）
⑤禎子　さきざきの御参りのごとし　（東宮参入）

⑤にあげた禎子内親王の東宮敦良親王参入については、童女の装束を頼通が、下仕の装束を教通が整えたとあり、下仕については四人分であったことが記されている。従って、東宮参入の場合には、妍子の折同様、下仕の人数は入内の場合のそれよりも少ないということになろう。この供人の数字については、新全集の頭注が、「当時はあらゆる儀式が前例に従って行われたといえるが、『栄花』からも彰子の例が基準になっているらしいことがわかる。ただし、それは男性官人たちによる儀式の前例遵守とは異なり、既述の類似記事によりつつ書くという『栄花』の叙述法によるものであろう。」と指摘している。

また単に人数の多さばかりではなく、質にも心を砕いていたことは勿論であり、それが次第に加熱していった様は「あさみどり」巻の威子入内の記事に述べられている。

大人四十人、童女六人、下仕同じ数なり。はじめの宮々、摂政殿などに、皆人々こみ参りて、今はえしもやと思しめしつれど、いづれも恥なき人々多く参りこみたり。童女は、その夜の御車寄するまで選り調へさせたまへるほど、推しはかるべし。二宮の御参りのをりをりのことをぞ、世語に人々聞えさすめるを、これは今すこし勝りたり。世の中の人の御心掟、昨日に今日は勝りてのみあるわざなれば、よろづそれにしたがひてめでたし。

「はじめの宮々」「二宮」とは、彰子・妍子のことを指す。既に多くの方のためにしかるべき女房たちは集め尽くされてしまったのではないかとの杞憂が払拭されるという筆致は、道長女寛子に小一条院を婿取る条りにも見受けられ、『栄花』の得意とするフレーズであったと憶しい。

尚、「わかばえ」巻に見える、万寿二年正月二十三日の皇太后妍子大饗の記事には、袿を十八枚も二十枚も重ねた女房たちの服装の華美について、小野宮実資から皮肉を言われた頼通が妍子に苦言を呈したこと。頼通自身もこの件で道長から叱責されたことが記されている。「ころものたま」巻に見える、翌万寿三年五月十九日から枇杷殿で行われた故三条院追善のための法華八講の記事を参照すると、この時には妍子方女房たちも、「はじめの日撫子を五つ着て、上に同じ色の薄物、織物を着て、菖蒲の唐衣、摺衣なり。」とあり、「世の常のなり」を心掛け過差を改めたことがわかる。『源氏物語』の女三宮や『狭衣物語』の今姫君のあはつけき女房たちの例を引くまでもなく、女房たちのあり方はそのまま主の評価に繋がるのであり、妍子や頼通は慌てて改善につとめたことであろう。

これらの入内あるいは東宮へ参入した特別な姫君に対して、通常の場合には大切にかしづかれた姫君であっても、その御前は女房二十人、童女四人、下仕四人という構成であったと思われる。たとえば、「はつはな」巻に見える、具平親王が后がねとして育てた女隆姫に頼通を婿取る記事には、

女房二十人、童女、下仕四人づつ、よろづいといみじう奥深く心にくき御有様なり。

とあり、「たまのむらぎく」巻で、頼通が北の方の妹中君に、敦康親王を婿取る場合も、「もとのしづく」巻で斉信が后がねとして育てた姫君に長家を婿取る場合も同様である。先にも少し触れた「ゆふしで」巻で道長女寛子に小一条院を婿取る折や「布引の滝」巻で斎宮媞子内親王が宮中の初斎院に入る折については、いかに選びぬかれたかの詳細が語り添えられるものの、女房の人数はやはり二十人である。

殊に人少なな場合としては、「ゆふしで」巻に、道長女寛子に小一条院を婿取られてしまった堀河女御延子について、

御前に女房二三人ばかりさぶらひつれど、おはしましつれば皆入りにけり。かやすき人々のさぶらひしかども、このごろ皆出でて、えさらぬ人々ぞさぶらひける。

とあるのが注目される。堀河院の荒廃ぶりと併せ、顕光・延子父娘が後に物の怪となって祟るのも無理ないと思わせる落魄の様である。

また、「くものふるまひ」巻には、寛徳元年九月、彰子の御堂である東北院の念仏会に、章子内親王が渡御した折の記事の一

節に、

女房十人ばかりして忍びやかなれど、上達部、殿上人いと多く参りたまへり。

との叙述が見える。「女房十人」とは、内親王の供廻りとしては人少なで「忍びやか」な観がある。しかしながら、「みはてぬゆめ」巻に見える、道兼が養女として大切にかしづいている昭平親王女に公任を婿取る場面に、

二条殿の東の対をいみじうしつらひて、恥なきほどの女房十人、童女二人、下仕二人して、あるべきほどにめやすくしたてておはしそめさせたまふ。

とある様に、その主によっては充分な人数でもあった。ただ、「あさみどり」巻で道兼女が威子のもとに出仕するにあたって、母北の方と相談する兄兼隆の言葉に、

「大人十人、童女二人、下仕、さやうにてあへはべりなん。帥殿の御方、大宮に参りたまひし、さやうになん聞きたまへし。」

とある。「帥殿の御方、大宮に参りたまひし」とは、伊周の次女周子が彰子のもとに出仕した先例を指す。后がねとしてかしづかれた姫君たちが、家運つたなく上臈の女房に身をやつす折の供人であり、ここでの「十人」という数字はいかにも侘しげな様子を与える。

尚、三十人の女房の例としては、「謌合」巻に見える、長元九年の一品宮章子内親王御裳着の準備の記事がある。後一条天皇の御悩・崩御のために延引された当日、長暦元年十二月十三日に参集した女房の人数については特に言及が見られないものの、準備の段階で「大人三十人、童女六人が装束」を用意したことが記されており、その人数が判明する。ただ、三十人すべてが章子付きの女房であったのか、上の女房などを含めての数字なのかは判然としない。

以上、考察してきたところによれば、『栄花物語』に於いても、女房の人数は二十人が通例であり、四十人の女房がつき従うのは、入内・東宮参入などの特別な場合ということになる。

おわりに

翻って、落窪の君御前の女房の人数を考えてみると、①その場面に至るまでに男君の指示で集められた今参りの女房によって女君の御前は三十人前後であったと思われること、②四の君が九州下向にあたって整えた女房の人数が三十人であること、の二点から、その人数が三十人未満であるとは考えられない。更に、他の文献に見える例と勘案するに、③四十人は、入内・東宮参入などの特別な場合の数字であること、④五十人は、後期物語特有の大胆な誇張と見受けられること、の二点から、四十人以上である可能性も考え難い。

従って、男君の庇護の下でかしづかれて暮らす女君の御前としては、「三十人の女房」こそが相応しいと結論したい。それは、作り物語に於いても、また歴史物語に於いても、殊更に厚く遇されていることを物語る数字であり、落窪の君の到達した幸福が俊蔭女たちのそれと等しいことを端的に示すものであった。

注

(1) 以下、『落窪物語』の引用は、藤井貞和校注『落窪物語　住吉物語』（新日本古典文学大系18・一九八九年・岩波書店）に拠ったが、表記を私に改めた箇所がある。

(2) 後文では、中の君付きで、越前守の召人であったとされる。構想の変化か。

(3) 「親しき人」とは和泉守の妻であるおばを指す。物語後文のおばからの手紙に、「むかしの人（あこきの母、おばの姉妹）の御かはりはあはれに思ひきこえて、女子も侍らねば、むすめにしたてまつらん、身一つはいとやすらかにうちかしづきて据ゑたてまつらん、と思ひて、さき〴〵も御迎へすれども、渡り給はぬこそうらみきこゆれ。」とある。

(4) 宮内庁書陵部蔵甲本を底本として、版本二種及びその他の伝本二十三種との校合を行われた、柿本奨『落窪物語注釈』（笠間注釈叢刊15・一九九一年）に拠れば、四十人とするのは、宮内庁書陵部蔵本甲・京都大学付属図書館蔵近衛本・京都大学文学部研究室蔵本・国学院大学蔵本・大阪府立中之島図書館蔵本及び寛政六年版本であり、その他の諸本及び寛政十一年版本は「三十人」とする。また、神宮文庫蔵本乙は「四十三十人」という混合本文をとるという。

(5) 中村秋香『落窪物語大成』・成蹊學園出版部・一九〇一年刊・一九二三年再版。

(6) 松尾聰校注『落窪物語　堤中納言物語』（日本古典文学大系13・岩波書店・一九五七年）。

(7) 三谷栄一校注『落窪物語　堤中納言物語』（日本古典文学全集10・小学館・一九七二年）。

(8) 三谷栄一・三谷邦明校注『落窪物語　堤中納言物語』（新編日本古典文学全集17・小学館・二〇〇〇年）。

(9) 稲賀敬二校注『落窪物語』（新潮日本古典集成14・一九七七年）。詳しくは解説で次の様に述べられている。

　底本の「三十人」は、それなりに意味を持つものだろう。多くの女性に取り囲まれた豪華な逸楽をあらわす慣用表現としては、『長恨歌』の「後宮佳麗三千人」というのがある。しかし「三千人の美女にかしずかれて」と越前守が言ったとすれば、これは誇張がひどすぎる。「三百人」でもまだ現実　味に欠ける。「三千人」のかわりに越前守は「佳麗三十人」ともじり、その上で「三千寵愛在一身」をも転用して生かしたのである。

　このように考えると、ここの底本の「三十人」は、諸本によって改めたりすべきではない。『長恨歌』が『源氏物語』の構成・表現に及ぼした大きな影響は、改めて述べるまでもない。

(10) 寺本直彦校注『落窪物語』（校注古典叢書・明治書院・一九八七年）。

(11) 柿本奨前掲書→(4)。

(12) 藤井貞和前掲書→(1)。

(13) 以下、『宇津保物語』の引用は、中野幸一校注『うつほ物語①～③』（新編日本古典文学全集・小学館・一九九九年～二〇〇二年）に拠ったが、表記を私に改めた箇所がある。

(14) 「楼の下」巻に見える、翌年楼から下りる際の描写にも、それぞれ三十人づつの女房がつき従っていることが記されている。

(15) 女御の御前ということから、後述する様に、その御前は四十人であったと推測される。

(16) あて宮の御前が四十人であるのは、後述する様に、彼女が東宮妃であるからと考えられる。

(17) 以下、『源氏物語』の引用は、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注『源氏物語①～⑥』（新編日本古典文学全集・小学館・一九九四年～一九九八年）に拠る。

(18) 引用は、稲賀敬二校注『落窪物語・堤中納言物語』（新編日本古典文学全集17・小学館・二〇〇〇年）に拠る。

(19) 以下、『浜松中納言物語』の引用は、池田利夫校注『浜松中納言物語』（新編日本古典文学全集27・小学館・二〇〇一年）に拠る。

(20) 以下、『狭衣物語』の引用は断りのない限り、小町谷照彦・後藤祥子校注『狭衣物語①・②』（新編日本古典文学全集・小学館・一九九九年～二〇〇一年）に拠る。

(21) 引用は、鈴木一雄校注『狭衣物語下』（新潮日本古典集成74・一九

八六年）に拠る。

(22) 以下、『紫式部日記』の引用は、中野幸一校注『和泉式部日記　紫式部日記　更級日記　讃岐典侍日記』（新編日本古典文学全集26・小学館・一九九四年）に拠る。

(23) 引用は、石井文夫校注『和泉式部日記　紫式部日記　更級日記　讃岐典侍日記』（新編日本古典文学全集26・小学館・一九九四年）に拠る。

(24) 引用は、松尾聰・永井和子校注『枕草子』（新編日本古典文学全集18・小学館・一九九七年）に拠る。

(25) 以下、『栄花物語』の引用は山中裕・秋山虔・池田尚隆・福長進校注『栄花物語①～③』（新編日本古典文学全集・小学館・一九九五年～一九九八年）に拠る。

(26) 頼通女寛子の入内と師実養女賢子の東宮参入については、それぞれ「さるべき人々」が集められたことが記されているが、人数については言及がない。